

大学生の親準備性に関する研究

A Study of Readiness for Parenthood in University Students

川 瀬 隆 千

大学生（N=163）を対象に、「親性準備性尺度」（佐々木，2000）を用いて、ボランティア活動などによる子育ての体験と親準備性との関連について検討した。その結果、子育て体験を持つ学生（N=35）は、そのような体験を持たない学生（N=128）より、高い親準備性を持っていることが認められた。特に、子育て体験は「乳幼児への好意感情」と関係していた。また、子育て体験のある学生は、そのような体験のない学生より、「親になるイメージ」を明確に持っている傾向があった。しかし、子育て体験と「育児への積極性」との関係は認められなかった。さらに、親準備性の性差について検討した結果、女性（N=128）は男性（N=27）より「乳幼児への好意感情」が高く、また「育児への積極性」が高い傾向にあった。しかし、「親になるイメージ」については性差が認められなかった。このような結果は、子育てを学習する場が日常生活の中から失われつつある今日、ボランティア活動などを通して子育てを経験することが、これから親になる若い世代にとって極めて重要であることを示唆している。学生など、若い世代に対する意識啓発と共に、地域の中で子育てを体験できる機会や場を増やしていく必要がある。

キーワード：親準備性、子育て体験、ボランティア活動、性差、親性準備性尺度

目 次

I はじめに

1. 子どもを知らずに親になる人たち
2. 親準備性
3. 親準備性の形成

II 調査方法

1. 調査対象者
2. 調査項目

III 調査結果

1. 子育て体験の有無
2. 子育て体験の有無と親準備性

3. 性差と親準備性

IV 考察

V 引用文献

I はじめに

1. 子どもを知らずに親になる人たち

子どもを知らずに親になる人が増えていると言われる。少子化、核家族化、地域社会の崩壊などの原因により、若い世代が身近に子どもと接する機会は著しく減少し、従来、自然に身につけていた「育児の学習」ができにくい社会状況にあるのである。このような社会の変化により、子どもや子育てに関する具体的な経験をしないまま親になる人たちが増えている。幼児虐待など、子どもや子育てをめぐる事件が増加している背景には、親が子どもや子育てを知らないという問題があるように思われる。

川瀬（2007, 2008）はNPO法人ドロップインセンターと共同で「学生保育サポーター事業」を展開しているが、その目的として、①母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援、②コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作りに並んで、③若い世代に対する親準備教育の提供をあげている。

本研究の目的は、若い世代（大学生）の親準備性の実態を明らかにすることである。

2. 親準備性

岡本・古賀（2004）によれば、親準備性は、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質、つまり「養育役割」であり、「情緒的、態度的、知的に親としての役割を果たすために十分なレディネス」、「心理的、行動的、身体的に育児行動を行うために必要な資質を形成していく、あるいは形成された状態」などと定義されてきた。育児行動という親としての役割を遂行するために必要な資質や準備性（レディネス）を「親準備性」と呼ぶのである。

育児行動に必要な資質やレディネス、すなわち「親準備性」には、子どもへの関心や子育てへの構え・育児観、親になることへの意識などが含まれるが、岡本・古賀（2004）は、親準備性には3つの内容があるとしている。①子どもに関するもの（子どものイメージや子どもへの関心）、②子育てに関するもの（母親による子育てへの構え、育児観、性、結婚、夫婦の役割・育児についての意識と態度、性の受容など）、③親となることに関するもの（親志向性、母性意識、親への親和性、親への同一化）の3つである。

3. 親準備性の形成

親準備性の形成には、妊娠以前の段階である乳幼児期から青年期までの経験が関わっており、誕生後、現実に親となるまでの経験と学習が重要な意味を持っていると言われる（岡村・古賀, 2004）。

たとえば、ボウルビィは、子どもは愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象に関する「表象モデル」を作り上げ、それをもとに、その後の対人関係を営んでいくという。このようにして構築された「モデル」は、自分と自分の子どもとの関係にも適用される。したがって、幼いころに安定した温かい親子関係を経験した子どもは、その関係をもとに構築したモデルを、自分の子どもとの関係に適用し、同じように安定した温かい親子関係を築くことができるのである（無藤・久保・遠藤, 1995；数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）。

現在では慎重な見方をする研究者が増えてきているが、このような親子関係の世代間伝達の視点は乳幼児虐待をする親の臨床事例研究によっても指摘されており（岡村・古賀, 2004）、虐待が世代を超えて繰り返されるとする「虐待の世代間伝達仮説」を支持する研究も多い（無藤・久保・遠藤, 1995）。親から受けた養育経験は親準備性の形成に大きな影響を及ぼすのである。

親準備性の形成に影響する要因として、個人の持つ養護性を指摘することもできる。養護性とは「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」のことを言い、その対象となる相手には、幼い子どもや老人、病人、悲しみにくれる人や元気がない人、あるいは、人間以外の動物や草花なども含まれるが、これらの人々を気遣ったり、実際に手を差し伸べたりするのは、養護性の現れであると言える。そして、親になる前に養護性をどれだけ身につけているかということが、実際に親になった時の子どもへの敏感さ、子どもに対する応答などに大きな意味を持つと言われる（無藤・久保・遠藤, 1995）。養護性の形成にも親との愛着関係が重要であるが、それ以上に、兄弟や身の回りの小さい子どもたちなどとふれあう経験や世話する機会などが重要な意味を持つであろう。

小さな子どもたちと触れ合ったり、世話したりする経験が養護性の形成を促すとすれば、そのような機会や経験を提供することが親準備性の形成に大きな意味を持つだろう。「子どもとの接触経験」の多いものは親準備性が高いという指摘もある（岡本・古賀, 2004）。

子どもとの接触経験について、川瀬（2007）は、学生保育サポーターの活動に参加した学生が、参加前よりも参加後において、子どものことをより理解するようになり、子どもを育てることに自信が付き、自分が親になるイメージができるなどの変化があったことを報告している。学生保育サポーターというボランティア活動への参加が親準備性の形成に大きな意味を持っていると言える結果である。

本研究では、子どもと触れ合ったり、子どもの世話をしたりするようなボランティア活動等への参加が親準備性の形成にどのような効果を持っているのかということ、学生へのアンケート調査によって明らかにする。

また、学生の親準備性について検討することは、学生保育サポーター事業の今後の展開を検討す

る上でも有益な情報を提供すると思われる。学生保育サポーター事業では、事前研修を行っているが、研修プログラムを作成する上で親準備性に関する情報が有益である。学生はどのような知識や経験を持っているか、逆に、彼らに不足している知識や情報は何か。それらを整理した上で、プログラムを再検討できるからである。

II 研究方法

ボランティア活動などを通して、子どもと触れ合ったり、子どもの世話をしたりしたような経験が親準備性の形成に及ぼす影響を検討するために、以下のようなアンケート調査を実施した。

1. 調査対象者

宮崎公立大学において「社会心理学」を受講している学生163名を対象に調査を実施した。調査対象者の性別は、男性27名（16.6%）、女性128名（78.5%）、性別不明8名であった。また、調査対象者の学年は、1年生が137名（84.0%）、2年生、3年生、4年生がそれぞれ13名（8.0%）、4名（2.5%）、1名（0.6%）であった。なお、学年不明のものは8名であった。

2. 調査項目

アンケート調査用紙には、性別、学年を問う質問の他に、以下の項目が含まれていた。なお、アンケート調査用紙は「社会心理学」の講義中に配布し、その場で回収した。記入時間は10分程度であった。

1) 親性準備性尺度

青木（1988）は「乳幼児への好意感情」（9項目）と「育児への積極性」（15項目）からなる「母性準備性尺度」を作成し、青年期後期の女子に対する信頼性と構成概念妥当性を確かめている。佐々木（2007）は、青木（1988）の作成した「母性準備性尺度」を成年期男子にも使用するため、項目のいくつかを修正した「親性準備性尺度」を作成し、その信頼性と妥当性（併存的妥当性、構成概念妥当性）を検討した。その結果、削除すべき項目も指摘されたが、親性準備性尺度の有効性が確認された。本研究では、佐々木の作成した親性準備性尺度を用いて、本学学生の親準備性について検討する。親性準備性尺度は「乳幼児への好意感情」（9項目）と「育児への積極性」（13項目）からなっている。それぞれの項目を表1、表2に示す。これらの質問に対し、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）の5点評価で回答を求めた。

2) 親準備教育に関する質問項目

川瀬（2007）は学生保育サポーター事業の親準備教育としての効果を測定するため、事業開始前

と実施後に、表3-1、表3-2、表3-3に示すような質問を行い、参加学生の変化を測定している。本研究では、親性準備性尺度に加えて、これらの質問も実施した。回答は「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）の5点評価である。

3) 子育て体験ボランティア活動への参加に関する質問項目

「乳幼児の世話をしたり、一緒に遊んだりするボランティア活動」への参加の有無について尋ねた。また、参加したことがある場合には、参加した活動について具体的に書かせた（自由記述）。

III 結果

1. 子育て体験の有無

はじめに、子育て体験の有無について検討する。ボランティア活動などにより、子どもの世話をしたり、子どもと遊んだりした経験の有無を尋ねた。また、経験がある場合には、具体的にどのような活動（経験）があるのかを尋ねた。その結果、子育て体験を持っている学生は35人（21.5%）、そのような体験を持っていない学生は128人（78.5%）であった。経験ありと答えたもののうち、具体的な体験内容の記載があったものは30人、記述数は33件であった。

学生の子育て体験をまとめると、「弟や妹、いとこや親せきの子どもなど、身近な乳幼児の世話をしたり、一緒に遊んだりした体験」という記述が7件、「学校の職場体験やインターンシップで保育園等に行き、子どもの世話を体験」したという記述が11件、「ボランティア活動等で子どもの世話を体験」したという記述が11件であった。なお、記述の具体性に乏しく分類が不可能な記述が4件であった。

これらの結果から、子どもと接したり、世話をしたりする体験を持つ学生は全体の21.5%と必ずしも多くないこと、子どもの世話をした体験を持っていても、その多くは職場体験やボランティア活動などであり、弟や妹の世話、親戚の子どもの面倒など、生活の中で乳幼児と接する機会はさらに少ないことが分かる。

2. 子育て体験の有無と親準備性

職場体験やボランティア活動等によって、子育てを体験している学生（35人）とそのような体験のない学生（128人）の親準備性を比較した。

まず、親性準備性尺度の「乳幼児への好意感情尺度」（9項目）の合計について比較したところ、子育て体験のある学生は、子育て体験のない学生よりも、「乳幼児への好意感情」が高かった（子育て体験のある学生の平均=40.86、子育て体験のない学生の平均=37.55）。t検定を行ったところ、両群の間に有意な差が認められた（ $t=2.19$, $p<.05$ ）。

また、「乳幼児への好意感情尺度」に含まれる9項目のそれぞれについて、子育て体験の有無との

関係を検討したところ、表1に示すような結果が得られた。項目6（赤ちゃんを見るとあやしんだり笑いかけたりしますか）、項目7（赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか）、項目8（赤ちゃんの世話をすることが好きですか）の3つの項目において有意差が認められた。子育て体験のある学生は、そのような体験のない学生より、乳幼児への好意感情が高いと言える。

表1 子育て体験の有無による「乳幼児への好意感情」の平均と標準偏差、t値

	子育て体験有	子育て体験無	t値
1. あなたは赤ちゃんが好きですか	4.69(.72)	4.41(.89)	1.66 ⁺
2. 赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか	4.86(.43)	4.72(.60)	1.28
3. 赤ちゃんのことについて知りたいと思いますか	4.31(.87)	4.15(1.04)	.87
4. 赤ちゃんに関心がありますか	4.51(.82)	4.14(1.11)	1.85 ⁺
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	4.43(.95)	4.04(1.25)	1.72 ⁺
6. 赤ちゃんを見るとあやしんだり笑いかけたりしますか	4.74(.61)	4.13(1.19)	2.96 ^{**}
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	4.66(.73)	4.15(1.20)	2.38 [*]
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きですか	4.26(1.09)	3.66(1.33)	2.42 [*]
9. 赤ちゃんに興味がありますか	4.40(.98)	4.15(1.06)	1.27

⁺p<.10、^{*}p<.05、^{**}p<.01

次に、親性準備性尺度の「育児への積極性」尺度について検討した。佐々木（2007）は親性準備性尺度の信頼性、妥当性を検討し、育児への積極性尺度の中の2項目（「育児はつまらない仕事だと思う」、「将来、自分が育児をするなんて考えたこともない」）は妥当性に疑問があるとして、削除する必要性を示唆している。そこで、本研究においてもこれらの2項目を分析から外した13項目によって「育児への積極性」の合計点を算出し、子育て体験の有無と育児への積極性との関係を検討した。その結果、子育て体験の有無と育児への積極性との間に有意な関係は認められなかった。

また、「育児への積極性尺度」の個々の項目について子育て体験の有無との関係を検討したところ、表2に示すように、項目4（育児は楽しいと思う）において、有意差が認められ、子育て体験のある学生の方が、そのような体験のない学生より、育児を楽しんでいると感じていた。その他の項目においても有意差は認められなかった。

さらに、川瀬による親準備教育に関する質問項目についても、同様に子育て体験の有無との関係を検討した。川瀬による親準備教育に関する質問項目は「育児機会」に関する2項目、「育児への自信」に関する4項目、「親になるイメージ」に関する2項目の8項目から構成されている。

それぞれの項目ごとに合計点を算出し、子育て体験のある学生（35人）とそのような体験のない学生（128人）を比較した。その結果、子育て体験のある学生は、そのような体験のない学生より、「親になるイメージ」が明確である傾向が認められた（子育て体験のある学生の平均=6.31、子育て体験のない学生の平均=5.53、t=1.88、p<.10）。しかし、子育て体験の有無と「育児機会」や

表2 子育て体験の有無による「育児への積極性」の平均と標準偏差、t値

	子育て体験有	子育て体験無	t値
1. 育児は素晴らしい仕事だと思う	4.57(.74)	4.45(.75)	.83
2. 育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う	2.83(1.10)	3.10(1.09)	-1.31
3. 育児によって自分自身もまた成長できると思う	4.74(.66)	4.65(.62)	.74
4. 育児は楽しいと思う	3.89(.93)	3.49(1.07)	1.99 [*]
5. 育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う	3.09(1.20)	3.14(1.07)	-.26
6. 育児は人の生きがいだと思う	3.37(.97)	3.43(1.17)	-.25
7. 育児はつらい仕事だと思う	2.74(1.29)	2.45(1.04)	1.38
8. 育児をしていると、自分の好きなことができないと思う	2.43(.98)	2.35(.94)	.43
9. 将来育児をするのが楽しみだ	3.80(1.26)	3.87(1.08)	-.31
10. 育児をしている親はかがやいて見える	4.00(.92)	3.84(.89)	.95
11. 育児をしている親は疲れてみすばらしく見える	4.17(1.01)	3.84(1.00)	1.75 ⁺
12. 自分も育児をやってみたいと思う	4.03(1.04)	3.99(1.05)	.18
13. 自分は育児をすることには自信がない	2.63(1.17)	2.76(1.12)	-.60

⁺p<.10、^{*}p<.05

「育児への自信」の間には一定の関係は認められなかった。

「育児機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」の3尺度を構成する8項目のそれぞれについて、子育て体験のある学生とそのような体験のない学生を比較した結果を表3-1、表3-2、表3-3に示す。表3-2に示すように、項目6（子どもがどんな気持ちでいるのか、理解できると思う）において有意差が認められた。すなわち、子育て体験のある学生は、そのような体験のない学生より、子どもの気持ちを理解できると回答していた。その他の項目においては、有意差は認められなかった。

表3-1 子育て体験の有無による「育児機会」の平均と標準偏差、t値

	子育て体験有	子育て体験無	t値
1. 普段の生活の中で、子どもをあやしんだり、オムツ替えをしたりするなど、乳幼児の世話をすることがある。	2.20(1.51)	1.73(1.21)	1.91 ⁺
2. 普段の生活の中で、乳幼児と遊ぶ機会がある。	2.26(1.58)	2.00(1.32)	.98

⁺p<.10

表3-2 子育て体験の有無による「育児への自信」の平均と標準偏差、t値

	子育て体験有	子育て体験無	t 値
3. 自分ひとりで、しばらくの間、乳幼児の世話を する自信がある。	2.43(1.29)	2.16(1.14)	1.18
4. しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある。	3.38(1.28)	3.00(1.40)	1.43
5. 子どもが悪いことをしたとき、上手に叱ったり、 注意したりする自信がある。	2.97(1.27)	2.70(1.20)	1.16
6. 子どもがどんな気持ちでいるのか、理解できると 思う。	3.00(1.11)	2.55(.98)	2.32*

*p<.05

表3-3 子育て体験の有無による「親になるイメージ」の自信の平均と標準偏差、t値

	子育て体験有	子育て体験無	t 値
7. 将来、自分が親になる姿をある程度想像するこ とができる。	3.14(1.29)	2.74(1.14)	1.79+
8. 子どものいる生活をある程度明確にイメージす ることができる。	3.17(1.20)	2.78(1.15)	1.76+

+p<.10

表4 性別による「乳幼児への好意感情」の平均と標準偏差、t値

	男	女	t 値
1. あなたは赤ちゃんが好きですか	4.11 (1.05)	4.55 (.79)	2.49*
2. 赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか	4.52 (.64)	4.81 (.50)	2.64**
3. 赤ちゃんのことに ついて知りたいと思 いますか	3.85 (1.20)	4.26 (.94)	1.94+
4. 赤ちゃんに関心 がありますか	3.93 (1.30)	4.29 (1.01)	1.62
5. 赤ちゃんと一緒に 遊ぶことが好き ですか	3.74 (1.51)	4.20 (1.12)	1.83+
6. 赤ちゃんを見ると あやしたり笑い かけたりします か	3.93 (1.41)	4.32 (1.05)	1.64+
7. 赤ちゃんを抱いて みたいと思いま すか	3.70 (1.41)	4.38 (1.04)	2.85**
8. 赤ちゃんの世話を することが好き ですか	3.22 (1.42)	3.90 (1.27)	2.47*
9. 赤ちゃんに興味 がありますか	3.78 (1.25)	4.29 (.98)	2.34*

+p<.10、*p<.05、**p<.01

次に、親準備性尺度の中の「育児への積極性尺度」について検討したが、有意な性差は認められなかった。「育児への積極性尺度」に含まれる13項目のそれぞれについて性差を検討したところ、表5に示すような結果が得られた。項目1（育児は素晴らしい仕事だと思う）、項目3（育児によって自分自身もまた成長できると思う）の2つの項目において有意な性差が認められた。すなわち、女性は男性より、育児は素晴らしい仕事であり、育児によって自分も成長できると感じていた。

表5 性別による「育児への積極性」の平均と標準偏差、t値

	男	女	t 値
1. 育児は素晴らしい仕事だと思う	4.22 (.97)	4.56 (.65)	2.25*
2. 育児をしている間に、世の中の動きから取り残されて しまうと思う	3.41 (1.12)	2.95 (1.09)	-1.96+
3. 育児によって自分自身もまた成長できると思う	4.50 (.71)	4.74 (.54)	1.98*
4. 育児は楽しいと思う	3.26 (1.20)	3.64 (1.02)	1.72+
5. 育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭く なると思う	3.11 (1.40)	3.13 (1.05)	.06
6. 育児は人の生きがいだと思う	3.19 (1.15)	3.49 (1.13)	1.26
7. 育児はつらい仕事だと思う	2.44 (1.16)	2.49 (1.10)	.20
8. 育児をしていると、自分の好きなことができない と思う	2.44 (.97)	2.31 (.94)	-.66
9. 将来育児をするのが楽しみだ	3.67 (1.24)	3.91 (1.10)	1.01
10. 育児をしている親はかかやいて見える	3.93 (.87)	3.90 (.88)	-.15
11. 育児をしている親は疲れてみずばらしく見える	3.89 (.93)	3.91 (1.04)	.12
12. 自分も育児をやってみたいと思う	3.70 (1.33)	4.07 (.98)	1.65
13. 自分は育児をすることには自信がない	2.85 (1.32)	2.67 (1.07)	-.76

+p<.10、*p<.05

3. 性差と親準備性

親準備性の形成には性差も関係するものと思われる。たとえば、一般に養護性は男性より、女性の方が強いと言われる（無藤・久保・遠藤，1995）。ここまでは、子育て体験のボランティア活動など青年期以降の学習による側面について検討してきたが、次に、性差など学習には寄らない側面について検討するため、親準備性尺度と川瀬による親準備教育に関する質問項目について、男性（27人）と女性（128人）の平均を比較した。

まず、親準備性尺度の「乳幼児への好意感情尺度」（9項目）の合計について比較したところ、女性は男性より「乳幼児への好意感情」が高かった（女性の平均=39.0、男性の平均=34.78）。t検定を行ったところ、両群の間に有意な差が認められた（ $t=2.54$, $p<.05$ ）。「乳幼児への好意感情尺度」に含まれる9項目のそれぞれについて性差を検討したところ、表4に示すような結果が得られた。項目1（あなたは赤ちゃんが好きですか）、項目2（赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか）、項目7（赤ちゃんを抱いてみたいと思いませんか）、項目8（赤ちゃんの世話をすることが好きですか）、項目9（赤ちゃんに興味がありますか）において、有意な性差が認められ、女性は男性より、乳幼児への好意感情が高かった。

さらに、川瀬による親準備教育の質問項目（育児機会、育児への自信、親になるイメージ）について検討したが、有意な性差は認められなかった。「育児機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」のそれぞれ項目についても有意な性差は認められなかった。分析の結果を表6-1、表6-2、表6-3に示す。

表6-1 性別による「育児機会」の平均と標準偏差、t値

	男	女	t値
1. 普段の生活の中で、子どもをあやしたり、オムツ替えをしたりするなど、乳幼児の世話をすることがある。	1.74 (1.40)	1.88 (1.28)	.49
2. 普段の生活の中で、乳幼児と遊ぶ機会がある。	1.96 (1.48)	2.08 (1.38)	.39

表6-2 性別による「育児の自信」の平均と標準偏差、t値

	男	女	t値
3. 自分ひとりで、しばらくの間、乳幼児の世話をする自信がある。	2.04 (1.19)	2.26 (1.17)	.89
4. しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある。	2.81 (1.52)	3.14 (1.35)	1.11
5. 子どもが悪いことをしたとき、上手に叱ったり、注意したりする自信がある。	2.81 (1.55)	2.75 (1.15)	-.25
6. 子どもがどんな気持ちでいるのか、理解できると思う。	2.63 (1.21)	2.66 (.97)	.16

表6-3 性別による「親になるイメージ」の平均と標準偏差、t値

親になるイメージ	男	女	t値
7. 将来、自分が親になる姿をある程度想像することができる。	2.78 (1.31)	2.85 (1.16)	.29
8. 子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる。	2.84 (1.34)	2.93 (1.12)	.35

IV 考察

本研究は、親性準備性尺度を用いて、ボランティア活動などによる子育ての体験と親準備性との関連について検討した。その結果、子育て体験を持つ学生は高い親準備性を持っていることが認められた。

特に、子育ての体験は「乳幼児への好意感情」と関係しており、子育て体験のある学生の方が、そのような体験のない学生より、赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりし、赤ちゃんを抱いてみたいと思い、赤ちゃんの世話をすることが好きだった。

伊藤（2003）によれば、中西・牧野は、親になるために最も重要なことは「子ども好き」という感情を育てることであると論じている。親準備性のベースには乳幼児への好意感情があるのである。子育て体験のボランティア活動は親準備性のベースとしての「子ども好き」感情を育てる有意義な活動といえる。

また、子育て体験のある学生は、そのような体験のない学生より、「親になるイメージ」を明確に持っている傾向があった。

先にも述べたように、親準備性には、子どもへの関心や子育てへの構え・育児観の他に、親になることへの意識が含まれる。特に、大学生の年代になれば、近い将来、自分が子を持ち、親としての役割を遂行することをより明確に意識するようになるだろう。そのような意識をよりポジティブな方向に向けて促進するのが子育て体験などのボランティア活動などではないだろうか。

一方、子育て体験のボランティア活動と「育児への積極性」との関係は認められなかった。本研究の結果だけから明確なことは言えないが、このような結果は、ボランティア活動のネガティブな側面と言えるかもしれない。すなわち、ボランティア活動などによって、実際に子どもに触れ、子育ての現場を知ることにより、現実の困難さを意識せざるを得なくなるからである。育児は楽しいと思う反面、そのつらさや大変さも体験してしまうことにより、育児への積極性が低下してしまうかもしれない。

また、本研究では、子育て体験のボランティア活動など、青年期以降の学習によって形成される親準備性の側面と、そのような学習によらない親準備性の側面を比較するため、親準備性の性差についても検討した。

その結果、予想通り、女性は男性より「乳幼児への好意感情」が高かった。女性は男性より、赤ちゃんが好きで、赤ちゃんを見ると「かわいいな」、抱いてみたいと思い、赤ちゃんに興味があり、赤ちゃんの世話をすることが好きだった。

また、女性は男性より、育児は素晴らしい仕事だと思っており、育児によって自分自身もまた成長できると思っていた。このように、女性は男性より、育児への積極性が高い傾向にあった。

ただし、このような認識が現実を理解した上でのものなのか、理想化されたイメージなのかはわからない。上で述べたように、子育て体験のボランティア活動が育児への積極性に対して、ポジテ

ィブにもネガティブにも影響する可能性があるとするれば、女性は男性より、育児を理想化されたイメージでとらえているとも考えられる。この点については、さらに検討する必要があるだろう。

一方、「親になるイメージ」については性差が認められなかった。しかし、「親になるイメージ」に関する2項目の平均を比較してみると、子育て体験のある学生の平均が6.31、子育て体験のない学生の平均は5.53であるのに対し、女性の平均は5.78、男性の平均は5.68であった。このように子育て体験のある学生の平均は他の群の平均よりも高い。「親になるイメージ」は青年期以降の具体的な学習を通して形成されるものなのかもしれない。

本研究はあくまでも関連研究であり、子育て体験のボランティア活動などが親準備性を高めると言うような因果関係の推定には慎重でなければならないが、子育てを学習する場が日常生活の中から失われている今日、ボランティア活動などを通して、子育てを経験することは、これから親になる若い世代にとって、極めて重要なことであると言える。学生など、若い世代に対する意識啓発と共に、子育てを体験できる機会や場を増やしていくことが、子育て支援の重要なポイントとなるであろう。

V 引用文献

- 青木 まり (1988) 母性意識尺度, 心理尺度ファイル, 垣内出版, 380-383.
- 伊藤 葉子 (2003) 保育教育の変遷と親性準備性 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 147-154.
- 川瀬 隆千 (2007) 「学生保育サポーター事業」の効果について～NPO法人ドロップインセンタートとの共同研究～ 日本コミュニティ心理学会第10回大会発表論文集, 114-115.
- 川瀬 隆千 (2008) 学生保育サポーター活動が参加学生・家庭の意識に及ぼす効果 日本コミュニティ心理学会第11回大会発表論文集, 128-129.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000) 日本人母子における愛着の世代間伝達, 教育心理学研究, 48, 323-332.
- 無藤 隆・久保ゆかり・遠藤利彦 (1995) 発達心理学 (現代心理学入門2), 岩波書店.
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004) 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 佐々木綾子 (2000) 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.